



平成19(2007)年2月20日(火)発行

発行者 小浜市多田2-2 中山クリニック 院長 中山茂樹

http://www.nakayama clinic.jp

ここは一念、腰をあげましょうか。

停電もまたよし

小児科 医師 中山真理子

花の兄、梅の花はずいぶん前に満開となり、吹く風はまだ、冷たいものの明るく、暖かい日射はまぎれもなく“春”ですね。

どんよりと曇った重たい空に覆われている例年の今頃とは異なり、雲のない明るい景色が広がっています。暖冬の今年はお通勤・通学に不便を感じることもなく、身軽に活動でき、嬉しいのですが、喜んでばかりもいられないようです。各方面への影響も心配され、このまま温暖化が進めば気が気ではありません。

数えるほどしか降らなかった今年の雪ですが、一月七日、八日の連休の大荒れの天候は憶えていらっしゃいますか。風が強く、雷鳴もどろき、嵐のようなお天気でした。我が家の周辺はとくに風が強くなりやすい所で、あの日も電線がかなり揺れ雷も激しく、数回停電しては復旧するという状態を繰り返していました。それが、午前十一時前、復旧しない停電状態となってしまいました。我が家だけかと思いましたが隣近所も同様で、強風の影響で送電線が切れた(?)とのことでした。薄暗い部屋の中で、こたつもホットカーペットもエアコンも使えず、暖をとるすべてを断たれ身をちぢこませて暫く過ごしました。幸い火鉢と炭の存在を思い出し、ガスコンロで炭火をおこし、パチパチと音をたてておこる炭のあかあかと燃える火にほっと身も心も暖まる思いを経験しました。そこで、そのお屋はもちろん、炭火でゆっくり焼いたおもち。芳しい香りが部屋中に広がり、昔を思い出しながら思わぬごちそうにありつけました。

それにしても、現在の生活はなんと電気に依存していることでしょうか。わずか5・6時間の停電でこんな有様ですから、長期に渡ったらどうなることでしょうか。今の蛇口をひねればお湯が出る便利な生活から、一転、指先から肩まで冷たさを感じ、さらに感覚が麻痺するような冷水を使った台所仕事、薪をくべながら沸かす風呂の生活にはとうてい戻れそうにもありません。でも、地球温暖化を防ぐためにもこれまでの便利さを多少でも我慢したり、手放す覚悟が必要なのではないでしょうか。楽を憶えると体がなかなか動けなくなり、ますますなまけものになっていくようです。ふだんから、災害に備えることがとても大切ですが、それは物に対してばかりではありません。体がものをいいそうです。

折しも、車を排除し、大通りを人間だけが独占して、3万人が挑んだ東京マラソンがこの18日の日曜日に行われました。“走る”という人間に備わった動物的な能力を退化させてはいけません。

“老いは足から”といえます。春風を肌と感じながら走るのはさぞ気持ちよいことでしょう。

願いは一つ、笑って過ごせる毎日を!

看護師 杉本 久美

先月、京都嵯峨野の鈴虫寺へ行きました。この時期に鈴虫の鳴き声を聞きながら、短い時間でしたが住職の面白、おかしな話を聞かせてもらい、心落ち着く時間を過ごさせてもらいました。わらじを履いたお地藏さんに一つだけ願い事をすると、一軒ずつ廻ってその一つだけを叶えて下さるということでした。

欲張りな私?には厳しい選択でした。自分や家族の健康、20歳と18歳の娘の将来のことなど、叶えてほしい願いは一杯あるのに、たった一つだけとは! 悩んでいる間に私の番がきました。聞かれたとおりに自分の住所、番地を言って、「毎日、笑って過ごせますように!」、とっさに出た言葉でした。どうしてそんなことを言ってしまったのでしょうか。でも、どんな時でも“笑い”があると、心が和む気がします。

誰かの言葉を借りると「命があるだけ丸儲け」、そして「笑う門には福来たる」です。“お地藏さん!いつでも窓の鍵開けときます。いつでも私の部屋へ遠慮しないでいらっしゃい!40過ぎたれば、口元、目元、シワが1本、2本増えていても気になりませんから。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

《 後 書 き 》1) 真理子Drの文にもありますように、今冬、人が交わす挨拶はきっと、“暖かいですね” “いい天気ですね” でした。 2) 一方、産婦人科の過酷な労働を知る人の交わす言葉は“産婦人科医は大変ですね” です。下記をご覧ください。

『日本の産科は世界トップクラス』
なのに、今!
安全な分娩管理を受けられない
「お産難民」が50万人?

日本の産科医療が危機的状況にあります!

今、産科を閉鎖する病院・診療所が急増しています。少子化、医師・助産師不足などが原因とされていますが、実は、産科医療に対する一般の方々の誤解もその原因の一つなのです。このままでは、安全な分娩管理を提供する産科医療施設は激減し、いわゆる「お産難民」が全国で50万人になると試算されています。そのような危機的状況を回避するためにも、産科医療について正しく認識して頂き、より安全で快適なお産をめざす私たち産科医の思いを知って頂きたいのです。

誤解 その1

“お産が安全なのは当然”という「安全神話」

誤解 その2

“助産師がいらないとお産ができない?”

